追　悼

出雲さんの思い出

今年（2015 年）の日本甲虫学会大会は北九州市で 11 月 22 ～ 23 日に開催されたが，その 3 週間前の 11 月 1 日に出雲善浩さんが享年 74 歳で急逝された．大会のプログラムには，懇親会参加の丸印付きでお名前が掲載されていて，地元で開催される学会行事を楽しみにされていたことが偲ばれる．出雲さんは小倉出身の甲虫屋であるが，仕事の関係で，東京，倉敷，上野原と転勤・転居を繰り返した末に，晩年は地元に戻られていた．地元でも往年と違わず，大好きなカミキリとゴミムシの採集を熱心に続けられていた．生涯現役の虫屋であった．

私が出雲さんと初めてお会いしたのは，春まだ浅い高尾山のケーブルカー斜面である．当時私は高校生で，この高尾山でしか採れないとされていたヒラヤマコブハナカミキリを狙い，晴天の平日に授業をさぼってやってきたのである．出雲さんもおそらく会社を休んで来られていたのだろう．

この斜面は，週末ともなれば，東京近郊はおろか関西方面からもカミキリ屋が馳せ参じ，多いときには 20 人以上がひしめき合う有名採集地であった．ヒラヤマコブハナが採れるのはそれでも 1 日に 1 ～数頭で，陽がかげる日は採れないことの方が多い．また幾つか実績の高いポイントがあって，必ずそこに人が集中する．それだから，競争相手の少ない平日の晴天に来ることは，会社や学校をさぼるくらいの価値があることだった．その日は出雲さんが 1 つ採った．生きた現物を見せられ熱くなった私はその後も通い続け，何回目かにして小さな雌を採った．

出雲さんが倉敷に転勤された翌年だったと思うが，その単身赴任先に押しかけていったことがある．鳥取県の高鉢山でアカネキスジトラカミキリが発見されたばかりの頃である．梅雨の時分で成虫のシーズンはとうに過ぎていたが，その食害材を持ち帰りたいという思いがあって現地に出向いたのである．

車を降りて林道を進み，第一発見地の斜面に着くと，眼下には想像をしていたままの姿でご神木のエゾエノキがでんと横たわっていた．アカネキスジトラが採れるのはこの周辺だけであるという．あと半月もして盛夏になれば，ヤノトラカミキリも見られるという．もっとも当日は小雨交じりで，採りたいような虫も見当たらず，端からの予定通り，出雲さんのご指南のもと，これはという食痕のあるエゾエノキの太枝を数本持ち帰った．

ところがそのあと私は大失態をやらかした．もともとズボラな性格であるが，食害材を部屋に転がしたままにしていて，その存在を翌 5 月の連休まですっかり忘れていたのである．気づいてから材の表面を見ると，トラカミキリが羽化脱出した丸い穴が 2 つ空いている．アカネキスジトラのようであるが，普通種のキンケトラカミキリという可能性もある．何ともやりきれない思いを出雲さん宛の手紙に綴った．つまり私はバカでしたという手紙である．

北九州大会の 2 日目の午後，会議と講演の合間を抜けだして，私は高桑正敏さんと小倉の出雲さん宅を弔問した．大会会場のいのちのたび博物館と出雲さんのご自宅は，電車を乗り継いでも 30 ～ 40 分くらいしかかからない．ご都合がつかず今回の大会に参加できなかった出雲さんに代わって，学会が出張っていったような形である．不案内な土地ゆえご自宅に行きつくのに苦労したが，奥様の出迎えで何とか無難にご焼香を終えることができた．久しぶりにお会いする写真の出雲さんは，だいぶ白髪が増えられたようだったが，相変わらずの剛毅な笑顔が印象的だった．

祭壇の隅にはいくつか友人・知人からの手紙が添えられていて，そのなかにたまたまなのか，高桑さんの年賀状と私の手紙があることに気づいた．高桑さんもすぐに気づいたと言っておられた．おそらく奥様が私たちの訪問に先立ち，遺品のなかから見つけてそっと置いてくださったに違いない．それにしても，その手紙が倉敷時代に私が送ったものであることは，やはり偶然としかいいようがない．あのとき出雲さんはすぐにご返事をくださり，当年に採集したばかりのアカネキスジトラの標本を 1 つ私に譲ってくれたのである．そういう気遣いのある人だった．

（新里達也）